

琉球大学学術リポジトリ

亜熱帯地域における経済作物としてのイチゴ栽培

メタデータ	言語: 出版者: 南方資源利用技術研究会 公開日: 2014-10-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松田, 義昭, 上原, 周夫, 濱井, 義則 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002016781

④ 亜熱帯地域における経済作物としてのイチゴ栽培

北中城村農業開発（株） ○松田義昭、上原周夫、
濱井義則

我が国におけるイチゴの生産量は、ミカンに次ぐ第二の地位を占め、価格の安定と消費の確実な伸びは今後の生長安定作物として期待がかけられている。しかし、日本で唯一亜熱帯地域に位置する沖縄県では気候的条件から苗の夏越し、品質面等に問題をのこし、未だ本格的な栽培にいたっていない。このような背景を基盤とし、演者らは、特に経済作物として不可能とされていたイチゴの栽培を可能にした。

演者らが研究、栽培している品種は、1984年から導入し、3年間沖縄の気候に順化後、特に耐暑性が強く、生育も旺盛なものだけを選抜し、さらに、それらを組織培養で培養したとよのか種である。本品種は、生食用主力品種で果実は球形ないし円錐形で光沢に富み、糖度、香気が高く、輸送性、日持性にすぐれている。

沖縄県でイチゴの栽培が行なわれていない大きな原因の一つは、亜熱帯気候ゆえランナーの発生が少なく、ランナー育成苗の確保がきわめて難しい点にあった。演者らの苗を親株として、ランナー育成苗を検討してみると、その結果、500本の親株から1万3000本、約25倍以上の苗が確保できることがわかった。また、それらの苗を定植時まで育苗すると、いずれもクラウン径が1cm以上で苗重量30g前後の定植苗に成長した。

沖縄県でイチゴ栽培が行なわれていないもう一つの原因は小果が著しく多く市場性からみても不利な点があった。しかし、演者らの苗で調査したランナー育成苗の結果では、S級以上の商品価果重量が86.6%、その中でM級以上の果重量が72.2%を占め、S級、M級の価格の高い12月は、S級、M級が多く、逆に本土で大果の少ない2月はL級、2L級の出荷が見込まれ、市場性の面からみても沖縄県でのイチゴ栽培が極めて有利であることが明らかとなった。一方、収量面では一株あたり平均収量が440gで10aあたり3.5tの収量が期待できる。ちなみに沖縄県のイチゴ消費量は約20億円と推定され、昭和63年度の県中央卸売市場における平均単価はとよのかで1kgあたり1165円と高く、イチゴが極めて有望な経済作物であることがうかがわれる。